

インドネシア語話者におけるコード切り替えの 様相について——書簡を中心に——

金 沢 朱 美

はじめに

本稿で扱うコード切り替え (code-switching ならびに code-mixing)¹⁾ の様相は、あるインドネシア語話者 (以下、S・S氏)²⁾ の私的な書簡におけるインドネシア語と英語と日本語の出現状況を考察したものである。

S・S氏は日本語教育の現場等で昨今問題になっている減算的バイリンガルや二重半バイリンガルではない。母語やインドネシア語を駆使する能力をもち、職場で英語を日常的に使用する言語環境にあり、大学で日本語コースを専攻した。

本稿ではS・S氏の筆者宛私信 (郵送での手紙ならびにeメールをまとめて書簡とする。) に現れたコード切り替えの様相を観察することにより、その言語的效果について考察した。考察の結果、S・S氏は、個人的な感情を吐露した私信において、文レベルで頻繁に「比喩的コード切り替え (metaphorical code-switching)」³⁾ とよばれるコード切り替えを行うことにより、より効果的なメッセージの伝達のために、単一言語運

用のみではなし得ない豊かな表現活動を創造していることがわかった。

一 書簡発信者について

書簡発信者のS・S氏は、四二歳、女性、一九八〇年八月—一九八三年七月まで国立北スマトラ大学 (以下USU) 付設の日本語科三年コースに在学し、卒業した。

筆者は一九八〇年八月—一九八二年一〇月までUSUにおいて、S・S氏に日本語を教授した。

S・S氏は在学中、クラスで文法、読解、筆記、作文等で常に首位の成績を修めており、日本領事館による特別奨学金の支給を受けていた。国際交流基金による日本派遣語学研修生候補二人のうちの一人に残ったが、声が小さく、おとなし過ぎて、潜在的な会話能力が発揮されていないとの理由で、惜しくも最終的に選抜されなかった経緯がある。他方、研修生として選抜されたH・M氏は、文法力はS・S氏よりも劣るが、日本語の口頭運用に積極的であるという理由で派遣されたものである。H・M氏はその後、研鑽を積み、母校の日本語教員になっている。

S・S氏は卒業後、日系外資企業に五年勤務し、その間、日本人社員にインドネシア語を教える際に日本語を使用した。社内公用語は英語、インドネシア語であり、日本語を日常的に使用する機会はなかった。その後、米系企業に十年以上勤務し、今日に至っている。

二 書簡の構成言語について

書簡の構成言語はインドネシア語、英語、日本語である。資料として次の書簡の言語使用状況を観察した。

- ① 二〇〇二年五月二四日 郵送による書簡
- ② 同年八月二日 eメール
- ③ 同年八月十五日 eメール
- ④ 同年九月一日 eメール
- ⑤ 同年十月一六日 eメール
- ⑥ 二〇〇三年一月一四日 eメール
- ⑦ 同年七月三日 eメール

①から⑦までの書簡における各言語の出現状況を見るために、各言語の文レベルでの出現回数ならびにコード切り替えの頻度について調べた。インドネシア語のみの文、英語のみの文、日本語のみの文、同一文中でコード切り替えがなされている混合文に分類した。混合文についてはインドネシア語を基本使用言語とし、英語混合、日本語混合、英語―日本語混合の各文、英語を基本使用言語とし、インドネシア語混合、日本語混合、インドネシア語―日本語混合の各文、日本語を基

本使用言語とし、インドネシア語混合、英語混合、インドネシア語―英語混合の各文に分類した。同一文中でのコード切り替えは単語レベルでの切り替えの他、句や節レベルでの切り替えも多く見られる。各言語内で使用されている外来語については、既に基本使用言語の単語として定着しているものならびにLondon School等の固有名詞についてはコード切り替えとはみなさなかった。

三 結果

結果は次のようになった。(表参照。)

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	合計
イ語のみ		49	3	2	21	0	0	4	79
英語のみ		10	2	14	1	21	10	2	60
日語のみ		0	0	0	0	1	1	0	2
混合文	イ-英	17	0	0	4	0	0	0	21
	イ-日	1	0	0	2	0	0	2	5
	イ-英・日	1	0	0	0	0	0	0	1
	英-イ	0	0	3	1	2	0	0	6
	英-日	1	0	0	0	2	1	0	4
	英-イ・日	1	1	0	0	1	0	1	4
	日-イ	0	0	0	0	0	0	0	0
	日-英	0	0	0	0	0	0	0	0
	日-イ・英	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		80	6	19	29	27	12	9	182

表中、イ語はインドネシア語、日語は日本語を指す。

日本語のみで構成された文は「新年明けましておめでとうございませう」「さようなら」以外は皆無で、日本語を基本使用言語としたインドネシア語混合、英語混合、インドネシア語—英語混合文も皆無であった。S・S氏の言語生活の中で、いかに日本語が定着していないかを示す一端であろう。

四 考察

書簡①では表にみるように使用されている言語のうち、インドネシア語のみの文が大半を占める。基本的にはインドネシア語で書かれた書簡である。英語、日本語の使用状況をみると、英語のみの文は一〇例みられるが、日本語のみの文は皆無である。混合文は二一例みられ、そのうちの大半の一七例がインドネシア語を基本使用言語にし、英語文へのコード切り替えを行っている。以下の例文のインドネシア語文はイタリックで示し、拙訳を付した。

①-1

Dear Akemi Sensei,

Hope you are well in Japan. I write in ^② *bahasa Indonesia* because I missed all my Nihon-go. I'm very unlucky on this. But I am still keeping trying to remember several words. (^③…語)

Saya sangat senang sekali waktu bisa dapat nomor telepon Ibu Akemi… (朱美先生の電話番号を入手したときすごく嬉しかったです。…)

右にみるように冒頭は英語で始まっており、日本語は、例えば「Sensei」のように、英語での他の表現をもってしては、「Sensei」に込めたS・S氏の気持ちを表現できないであろうと思われる箇所のみ、単語レベルで使用されている。二段落目からインドネシア語にコード切り替えが行われ、前述したように基本的にはインドネシア語でS・S氏の現況が縷縷述べられている。九段落目^④にインドネシア語から英語への次のような文中コード切り替えが出現する。

①-2

^⑤ *Saya kirimkan beberapa photo saya untuk ibu for knowing how old I am now (smile…), but I am happy because I'm always counting how God blessing me everyday.*

^⑥ *Karena saya selalu ingat saya bisa bekerja sampai sekarangpun itu adalah karena kebaikan Tuhan buat saya.*

^⑦ (私は先生に数枚の写真を送ります。)

^⑧ (なぜなら私はいつも、私が今日まで働けるのは神の思し召しによることを覚えているからです。)

最終段落に

①-3

Apakah Ibu masih mengajar Nihon-go? (先生は今でも日本語を教えていますか?)

ついで、最後に

①-4

Salam, dan take care of yourself. (おちいさん、そっつ) とかね。

その後につかされている追伸での同封の写真の説明は全て英語文である。

①—1、2、3、4を観察すると、強く訴えたい、強く感情を表出したい箇所において、単語レベルないしは文レベルで外国語を使用しているのではないかとということが考えられる。S・S氏と筆者とは一九八四年秋以来二〇〇二年八月までの十八年間、書簡は二、三度の交換のみで、再会を果していなかったから、S・S氏の書簡①には筆者の連絡先を得て、再びの交流が開始されることへの大きな期待が感じられる。八〇文から成る長い書簡のなかで、近況を知らせるにあたり、特別な感動を伝えたいときに、特別な効果をもたらすものとしてコード切り替えを行ない、外国語の単語ないしは外国語文を挿入するらしいことがわかる。①における基本使用言語であるインドネシア語のみでは語りかけが平板にしか聞こえず、表現し得ない感情を他のコードを混合させることによって強く訴えることができる。本人にとって感じられる場合に他のコードを併用しているようである。日本語の使用については、一文を構成するまでには至っておらず、呼称としての「sensei」や呼称に付す「san」、S・S氏にとって特別の意味合いをもつ「Nihon-go」等の単語のみである。

書簡②は本文が四文から成る短いeメールで本文のうち、一文と挨拶の語が英語で書かれている。

②

Dear Ibu Akemi

Terima kasih buat pertemuan kemarin yang sangat berkesan buat saya. Ini hal yang tak pernah terbayangkan sebelumnya buat saya bisa ketemu lagi. Saya akan ceritakan ke teman2 kita dulu di Bhs. Jepang. I'll never stop searching them all.

Wish you all success, and all the best. (昨日はお会いできてほんとうにありがとうございました。とても印象に残りました。再会できるなんて本当に思ってもいませんでした。かつての日本語のクラスの友人たちに(先生に会えたこと)話します。)

③は基本使用言語が英語であり、混合文の場合も英語文を基本に、インドネシア語の単語レベルならびに節レベルでのコード切り替えが三例見られる。

③—1

2 days ago I've got H.M in USU campus④ dan cerita banyak tentang kerja dan mengajar. A. was not in the office. They enjoy working as⑤ dosen in USU. (⑥そして仕事や日本語を教えることについてたくさん話をしました。)

(④大学教員)

文中に現れるH・M氏とA氏はUSU出身でS・S氏と同級であった。H・M氏は既述したように日本派遣語学研修生として最終的に選抜された学生であった。いずれも筆者の教え子であるが、その学生たちが母校の教員になっている。そのことを筆者に報告するために、この場合はより強くその感慨を示すことができる筆者との共通コードとして、英語文のなかに「dosen」というインドネシア語を使用したの

であろう。

③-2

Talked to ③Adek N. also then, and said our meeting story, she was also surprised! Adek said... (③妹)

右記の文中では、adekと呼ばれるN氏が、N氏の家族の中で末子であり、常に「adek」と呼ばれ、他人との間でも「adek」が愛称になっっていることを示している。当時、筆者のクラスにおいてAdek N. も一緒に勉強をしていた。N氏の家族のみならず、皆がその愛称で呼んでいた同級生Adek N.のことを強く筆者に喚起させるために、名前だけではなく愛称も書き、使用語彙全てを英語にするよりも、文中使用コードを切り替えてAdekを反復させているものと思われる。

ここまでみてくると、先にみたような特別な感動を伝えたいときに特別な効果をもたらすコードとして外国語の単語や外国語文を挿入するだけでなく、その逆の場合も生起することがわかる。外国語文が基本言語として使用されている文章のなかに、母語の単語や文を挿入するのも無意識に同じ効果を期待してのことであると思われる。

このようなS・S氏のコード切り替えは社会言語学におけるコード切り替えの分類で見ると、その多くは比喩的コード切り替え (metaphorical code-switching) に属すると思われる。ウォードハウ (Wardhaugh, 一九九二) によると、「特別な感情を喚起するため」「他人に対する微妙な感情の彩を伝える場合」「特別な効果をねらって」「ヒルトヒル (Hill and Hill, 一九八六) の事例を引いて「利用できる二つの言語体系に関連するそれぞれに異なる感情的音調、価値観、文

脈などの喚起によってもたらされる意味を…ことばに」付加するからである」と説明されている。⁽³⁾ 山内 (二〇〇三) においても、比喩的コード切り替えについて「…二つのコードを使うことによってこの話し手は、情報と共に自分の個人的な感情をも相手に伝えている」と説明されている。⁽⁴⁾

④には単語レベルで、⑤には初めて節レベルで日本語が現れる。

④

…saya teringat dengan semboyan 'gambarimasu'.

(私は「頑張ります」という標語をふと思い出しました。)

⑤Kyo Nihongo o benkyooshite, there is a presentation about education in Japan.

④の場合は明らかに標語としての訴えかけの効果をねらって書いたことがわかり、⑤の場合は日本語文で書こうとする試みの萌芽がみられる。

⑥には「Shinnen akemashite omedetoo gozaimasu」という挨拶文が現れるが、日本語力は依然挨拶等の慣用句の域を超えていない。

五 S・S氏へのインタビューならびにコード切り替えの理由について

S・S氏が書簡のなかでなぜ頻繁にコード切り替えを行うのか、なぜ基本使用言語として頻繁に英語を使用するのかという点について、二〇〇三年八月三日、ジャカルタ市で面接をした。

S・S氏は、

「日系企業に勤めていたときも社内語はインドネシア語と英語であっ

た。(書くときには)インドネシア語よりも英語を使用する方がもっと私の感情をよく表現できる。会社で口頭でアメリカ人と話すときには(米系企業であるので)(全部)英語を使い、インドネシア人とは(全部)インドネシア語で話したほうが話しやすい。しかし、書簡のときは相手が誰であっても(英語圏の人でなくても)、英語の方がもっと深く自己の感情表現ができるから(混合コードを使用する。)」と回答した。

同席した別のインドネシア語話者で、口頭でも会社関係の同国人とはインドネシア語と英語の混合コードで話している、ジャワ語が母語であるK・S氏はその理由について、

「英語ならplease, youで済むことがジャワ語やインドネシア語であると文化の縛りがあって、相手との距離を測りながら待遇表現を選ばなければならぬ。英語の方がsimpleであるからより話しやすく混合コードになるのだ。」と語っている。

職場によっては社内語が一〇〇パーセント近く英語である企業もある(例・米系石油会社等)。企業内における言語環境において外国語の使用比率が高くなればなるほど、その人の他の場面での言語生活においても、単語レベルでのコード・ミキシング(code-mixing)や文レベルでのコード・スイッチング(code-switching)が圧倒的に増え、やがて混合コードの確立に至ることが考えられる。

S・S氏の場合、書くときは英語の方がインドネシア語よりも感情をよく表現できるとし、先にみた書簡のように、インドネシア語、英語相半ばする傾向が見られた。一方、インタビューにみた回答のよ

うに、話すときには相手が英語圏の話者で他言語を知らない相手にも、英語コードだけを使用し、インドネシア語をある程度でも知っている相手にはインドネシア語のみで話す傾向が見られた。その結果、口頭語における混合コードの出現は激減する傾向が見られる。この傾向と、大学生時代極めて優秀であったにもかかわらず、口頭における日本語での発表の消極性から日本派遣選抜試験にもれたことや日本語における早い忘却とは関係があるように思われる。

また、「書簡のときは相手が誰であっても…」とS・S氏が前述するように、相手が同じインドネシア語話者の場合にも、S・S氏の書簡には英語文の頻用ないし併用が見られる。言い換えると、S・S氏の場合は、書記言語活動―特に私信等の感情表出が自由になされる書簡―についてはコード切り替えが常用化しているが、口頭言語活動における外国語の運用はそれほど達者ではなく、積極的で効果的な口頭でのコミュニケーション・ストラテジーとしてのコード切り替えには至っていないということが言える。

もう一点、これは別の視点であるが、参考になるのはインドネシアの大都市における英語教育偏重、国語教育軽視の傾向である。

インドネシアは島嶼国であるが、全島どこにおいても、国語であるインドネシア語教育は小学校において徹底しており、非常によく習得されているようである。その一方でジャカルタ市のある私立高校⁵⁾におけるインドネシア語の授業は週七〇分、英語の授業は二一〇分であり、大都市におけるこの高校においてもインドネシア語の授業は少なく、英語の授業が圧倒的に多い。この傾向は以前からずっと続い

ているとのことである。⁶⁾

S・S氏にこの点について確認した。S・S氏はクリスチャンで中学校、高等学校を通じてキリスト教系の学校に通ったので、この傾向は更に強く、中学校ではインドネシア語の授業は週九〇分、英語の授業は週二七〇分であったという。就職後も英語訓練センターに通ったとのことである。

筆者の観察によると、英語の教授内容も日本の中・高等学校におけるのとは比較にならないほど、口頭での運用能力養成に力をいれているため、日本の中学生、高校生のように英語は机上の学習ではなく、もっと身近な使用可能なコードの一つになり得ることが考えられる。従って、国語による表現で不足と感じられる場合は自然に英語コードにアクセスするであろうかと思われる。

本稿のはじめに述べたように、前述の二人は減算的バイリンガルや二重半言語話者では決してなく、インドネシア語を駆使できる能力をもっている。しかしながら、大都市におけるこのような英語教育偏重、国語教育軽視の傾向が今後ずっと続けば、今後の世代はインドネシア語で表現できない部分が漸増し、英語との混合コードに頼ることが更に多くなるであろう。現在も一部の人のためにはそうなのであるが、今後、大都市で教育を受けるインドネシアの多くの人のために英語との混合コードが書記言語活動のみでなく、口頭言語活動においても普通の表現の一方法になっていくことが考えられる。

六 結論

S・S氏の書簡からわかることは、基本使用言語としてインドネシア語または英語を使用していることである。基本使用言語が日本語になることはない。インドネシア語と英語のうち、いずれが基本使用言語になった場合でも、特別な感動を伝えたい、または特に強く強調したいこと、訴えたいことがあるときは、ストラテジーとしてインドネシア語、英語いずれかのうち、使用中の言語と異なるもう一方の言語にコード切り替えが行われる。日本語へのコード切り替えが現在のところ、極めて少ないのは、書簡①の冒頭でS・S氏自身述べているように、大学での日本語コース卒業後、今日までの日本語に対する長い空白期間のため、「I missed all my 'Nihon-go.' という状況にあるからである。しかし、「sensei」「san」「Nihon-go」「benkyoo-shimasu」「ganbarimasu」「shinnen akemashite omedetoo gozaimasu」等、日本語で表現することが最も効果的であると思われる場面においては日本語を使用している。現在のS・S氏の日本語力においては、大学時代の日本語専攻に対するわずかな痕跡を留めているに過ぎない。

S・S氏は二〇〇二年八月より週三回、一回二時間の日本語学習を再開しており、緩やかに日本語が単語レベルでなら増していくことも考えられる。二〇〇二年八月から二〇〇三年八月現在までにおける一週間六時間の学習の継続は、学習時間でいえばそれほど少ない時間とはいえない。しかしながら二〇〇三年八月二六日現在、進捗状況は使用教科書である『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）の二五課を修了したところで、教授速度ないし学習速度は遅い方であろう。

大学時代の初級前期、後期に使用した日本語の教科書は『日本語の基礎』（海外技術者研修協会）であり、『みんなの日本語』を生み出した大本の教科書である。文型積み上げ方式の方針も文型導入順序も全く同じで、元々技術研修生を対象にしていた教科書が、多様性をもつ広範な学習者にあまりにも広く用いられるようになったがために、語彙のみを一般化し、より使いやすくなったものである。それゆえS・S氏にとって使用しやすく、理解しやすい教科書であったはずである。その学習事項が私的書簡のなかにさえ生かされていないことは、S・S氏にとって日本語が今もなお、わずかな単語レベルを除いて、特別な感動を伝えるためのそれほど有力で効果的なコードになり得ていないことを示している。

日本語の運用能力を取り戻すのは、S・S氏の言語環境から考えると相当難しいと思われる。既述したように、日系企業においても英語がまず優先されており、英語が最も身近な外国語である。S・S氏はコード切り替えにおけるコミュニケーション・ストラテジーの効果を十分に発揮することのできるインドネシア語、英語の書きことばでの運用能力をもっているため、日本語文へのコード切り替えはそれほど必要がなく、今後、日本語学習がさらに進んでもコード切り替えは単語レベルに過ぎず、文レベルではそれほど顕著なものとならないことも考えられる。

おわりに

本稿ではコード切り替えの積極的で肯定的な効用についてみてきた。

以上考察したS・S氏の七通の書簡は全て私信である。私信は特定の相手に対する極めて個人的な語りかけであり、個人的な感情の吐露したものである。私信においてS・S氏は、文レベルで頻繁に比喩的コード切り替えとよばれるコード切り替えを行うことで、より効果的なメッセージの伝達のために、単一言語運用のみではなし得ない豊かな表現活動を創造しているといえるのではないか。インドネシア語、英語、日本語混合文を使用することにより、「繊細で豊かな会話の展開を可能にしている。」（金二〇〇三）のである。

S・S氏のインドネシア語には口語も文語も交じっており、英語にも外国人のなす誤用もあるであろうが、言語活動において一つ概念を表現し得る複数の言語コードをもち、その都度その都度アクセスしやすい言語、訴える力のより強いコードを選択することにより、単一言語運用の平板な言語活動から抜け出て、より複雑な自己表現を可能にしているといえるであろう。

S・S氏が日本語コードをほとんど喪失してしまっているのは残念であるが、現在、日本語学習を継続中であるため、やがて日本語コードが復活してくることを期待したい。

注

(1) 山本雅代（一九九一）によると同一文中におけるコード切り替えはcode-mixing、文間におけるコード・切り替えはcode-switchingであると整理されているが、実際には両方ともコード切り替えと呼ばれる場合が多く、その定義は人によって異なり一様でない。本稿では両方とも日本語ではコード切り替えと呼んだ。

(2) 本稿で取りあげるインドネシア語話者の母語はバタック語でありイン

ドネシア語は第二言語になるので、インドネシア語母語話者とはしなかった。

- (3) ロナルド・ウォードハウ(一九九二) 日本語訳(一九九四) 一四二、一四四、一四五頁。日本語訳では「隠喩的」と訳されている。
- (4) 山内進(二〇〇三) 九頁。
- (5) ジャカルタ市私立SMK Sasmita Jaya高等学校。
- (6) 二〇〇三年八月二〇日ジャカルタ市私立SMK Sasmita Jaya高等学校インドネシア語教員Mahmudi氏の談話による。

参考文献

- ・東昭二『社会言語学入門』研究社一九九七年
- ・エレン・ナカミズ「コード切り替えを引き起こすのは何か」『言語』二〇〇三年六月
- ・生越直樹「使用者の属性から見る言語の使い分け」『言語』二〇〇三年六月
- ・金 美善「混じり合う言葉―在日コリアン一世の混用コードについて」『言語』二〇〇三年六月
- ・真田信治ほか『社会言語学』おうふう一九九二年
- ・山内進『言語教育学入門』大修館二〇〇三年
- ・山本雅代『バイリンガル―その実像と問題点』大修館一九九一年
- ・ロナルド・ウォードハウ(田部滋ほか監訳)『社会言語学入門』リーベル出版一九九四年